HCニューズレター

No.16

Human Care News Letter

2015年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

ヒューマンケアと看護学

第十六回大会を開催して

香川大学　清水 裕子

九月十三日～十四日にかけて香川県高松市の高松港に臨むサンポート高松で第十六回大会を開催しました。大会テーマは、「ヒューマンケアと看護学」と題し、ヒューマンケアと看護学との関係について考える機会にしました。初日の午前中は、学術発表でした。口頭発表が七題、ポスター発表が三二題合計三九題の発表がありました。特に若い研究者が多く、うれしいことでした。審査の結果、この中から優秀口頭発表賞には山本麻理奈先生（香川大学医学部附属病院）、優秀ポスター発表賞には知久昌史先生（足立区スクールカウンセラー）が選考され、懇親会で表彰されました。

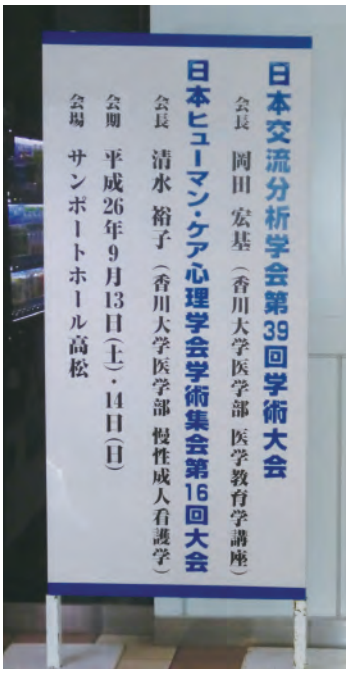
初日の午後は、特別講演とシンポジウムでした。特別講演は、日本に三十年以上滞在され、長年にわたりスピリチュアルケアの普及活動をなさった臨床パストラルケア教育研究センター理事長ウァルデマール・キッペス氏をお迎えし、ドイツ人から視た日本人のスピリチュアルケアに関する経験やヒューマンケアとしてのスピリチュアルケアについて説明をいただき、四一名が参加しました。シンポジウムは、「生活習慣病ー糖尿病患者のセルフマネージメントへのアプローチ」というテーマで、香川大学で開発された希少糖が糖尿病患者の食事管理をどのように変えていくかについて、香川大学希少糖研究所長・細胞機能生理学 徳田雅明先生と元高知県立大学宮武陽子先生をお迎えし、小玉正博先生の心理学の立場からの話題提供を交えながら意見交換を行い、三八名が参加しました。

二日目は、「学会認定の資格養成を考える」と題してラウンドテーブルを行いました。今回、合同大会開催を行った日本交流分析学会から江花昭一先生にコメンテーターとしておいでいただき、助産師の中込さと子先生、看護師の菊池和子先生、学校カウンセラーの竹澤みどり先生のお仕事とヒューマンケアに関する意見交換を行い、助言をいただきました。研修委員長経験者の長田先生、小玉先生の今後についてのご示唆もありました。最後に研修会は、慶應義塾大学看護医療学部、戈木クレイグヒル滋子先生に「グラウンデッド・セオリー・アプローチの方法」について、ご指導をいただき三五名の参加がありました。

今回は、四国で初めて開催しました。参加者総数は、日本交流分析学会第三九回学術大会との合算で二五一名であり約半数が当会の参加者であると思います。初日夕方の懇親会は、高松港の浜辺に建つ総ガラス張りのイタリアンレストランを貸し切り、和やかな会となりました。ここから埠頭の世界初の赤いガラス燈台に散歩する方々もありました。余興の香川大学医学部アカペラグループによるハーモニーは心が溶けてしまうようなさわやかな歌声でした。特に「花は咲く」のメロディーには心を打たれました。その後、日本交流分析学会岡田大会長が招かれたタカラジェンヌの参加があり、華やかな雰囲気につつまれました。会では若い研究者が優秀発表賞として賞讃され、これからの研究者に期待する思いを共有して宴を閉じました。遠方お越しの参加者に、あらためて謝意を表したいと思います。



大会会長 清水裕子先生



サンポートホール高松 大会会場入り口

特別講演

ウァルデマール・キッペス先生による「日本におけるスピリチュアルケア普及活動からの提言」

人間の営みを、トータルに支えようという本学会の設立の趣旨に沿って、今回、大会準備委員会は、人がそれぞれ唯一無比な存在として最期まで健やかに生き抜く方途を探るために、日本におけるスピリチュアルケアの先駆者として知られるキッペス先生をお招きしました。当日の感動的な講演内容の一端を、座長（清水・木村）の一人として報告させていただきます。

先生は、開始に先だち、日頃のベッドサイド臨床と同様に会場とも対話的な関係になれるよう、聴衆を前の方の席へと誘われました。最初に、ＷＨＯによるがん患者のスピリチュアルな痛みの緩和について言及された上で、「元気」には、身体的・心理的・社会的健康の他に「心（善悪・責任）とスピリット」があることを指摘されました。スピリットは各自が自分なりの定義をしなければ生きる力にはなりません、それは自分の存在意義、使命の発見をさせてくれますが、それを模索するとき心の悲痛な叫びとなることがあります。そして、人はとかく完璧でなければならないと思いがちですが、死を意識してスピリチュアルな苦悩の中に居る人に対して、何も出来ないと思うのでは無く、「そこに居る」こと、何かをすること（ｔｏ ｄｏ）ではなく、傍で自分なりに本心で生きること（ｔｏ ｂｅ）が大切です。それによって相手（患者）に、新たな出会いの中で本物の自分自身、自分の「核」を生きられる契機を提供できること、また、相手の「叫び」に対しては、スピリチュアルな耳で受け取り聴くことが重要であると述べられました。

講演の最後に「スピリチュアリティと信仰（宗教）」が日本では混在的に扱われますが、これらは別箇のものであること、また、両面で特定のものを持たなくとも尊厳に満ちて穏やかに逝き、今なおご自分の心に生き続けている人々の具体的な事例を写真とともに話されました。講演の中盤においても、自分自身への赦し、他者との和解、自他の生の根源との一致を通して、安心（信頼）へ至ることの可能性と重要性を指摘されましたが、健やかに最期まで生き抜いた人々の例示を通して、氏は、聴衆のひとりひとりが自分のこととして受け取り、自他へのスピリチュアルな探索とケアへの関心を深めさせてくださったように思います。質疑でも、会場との白熱した主張が交わされ貴重なひと時でした。

（いちかわ野の花心理臨床研究所　木村登紀子）



特別講演　ウァルデマール・キッペス先生

シンポジウム

「生活習慣病―糖尿病患者のセルフケアマネージメントへのアプローチ―」

本シンポジウムは大会二日目に行われました。最初に話題提供をしてくださったのは埼玉学園大学、本学会前会長の小玉正博先生です。先生は健康心理学およびヒューマン・ケア心理学の視点から、病者の内的過程を踏まえた「自分なりのセルフケア」という病気対処のあり様についてお話くださいました。セルフケアの難しい糖尿病の病気管理不良の背景とは、そして医療者側が求めるセルフケアと病者自身がとらえているセルフケアとの乖離、そこから見えてくる患者のナラティブを理解するということについて、わかりやすい図解とともに丁寧にお話くださいました。

次に、こうした難しい病気管理に大きな利点をもつと考えられる、自然界にわずか０．１％しか存在しない「希少糖」の可能性について、香川大学の徳田雅明先生からお話ただきました。四十年の研究から希少糖を安定して生産することが可能となり、自己管理のもっとも難しいであろう食事療法について、これまでの辛抱と努力を要する意識からちょっと肩の力を抜いて「時に満腹まで食べてしまっても、時にスウィーツを食べても」挫折感を味わうことなく継続できる自己管理は、結果的に糖尿病の悪化を予防できるというものです。さらに、複数の希少糖を組み合わせ、生活習慣病を予防・改善することに役立つことが期待されるなど、「希少糖」の無限大の可能性について夢の広がるお話をいただきました。

そして最後に、日々の生活の中でセルフマネジメントすることの困難さに直面している糖尿病をもつ患者の体験に直接的に関わり援助する慢性看護学の立場から、高知県立大学の宮武陽子先生がご自身のケア経験を含めて、関係形成を基盤にしたエンパワーメント・アプローチの視点から実践研究チームの取り組みについてお話くださいました。中でも、患者がセルフケアを実践していく過程において、生活史を編みなおしていくために物事を文脈化し、折り合いをつけてアイデンティティの再構成をしていく過程に寄り添うというお話が印象的でした。



シンポジウムの様子

シンポジウムに参加して、私自身医療者を育成する立場にありながら、いかにこの難しい病気管理について患者の主体性を尊重するという言葉によって、患者任せにしてしまっていたかを考えました。糖尿病患者としてではなく、糖尿病をもつ人の理解を深めながらサポートする複眼的視点と可能性を学ぶことができました。

（杏林大学　金子多喜子）

ラウンドテーブル

「学会認定の資格養成を考える」

本ラウンドテーブルでは、三人の話題提供者と一人のコメンテーターにより、ヒューマン・ケアに関わる多くの仕事の担い手が一定水準の質を保つための資格や研修のあり方をテーマとしました。座長の立場から、ラウンドテーブルの様子を紹介させて頂きます。

山梨大学大学院医学工学総合研究部の中込さと子先生からは、遺伝医療の経験に基づき、ヒューマン・ケア学会認定の心理学指導者を養成し、認定指導者による継続教育プログラムを集積することによって、ヒューマン・ケア心理学の基礎カリキュラムを作成することができるのではないか、との提案がありました。富山大学保健管理センターの竹澤みどり先生からは、学生相談の立場から、クライエントとの関係性の構築がヒューマン・ケアのエッセンスであり、それを身に着け、実践に活かすための研修等が期待される、との発表がありました。岩手県立大学看護学部の菊池和子先生からは、運動、スピリチュアリティ、ストレスマネージメントを焦点とする健康増進行動を促進する看護介入プログラムを実践されている立場から、看護師が他職種の考えを尊重し自分の意見を述べられるようアサーティブなコミュニケーション技法を学ぶ必要性を感じていることから、それらの研修会と学会独自の資格が求められているのではないか、との報告がありました。神奈川大学保健管理センターの江花昭一先生からは、三先生の話題提供を受け、「資格認定」を具体化するには、目的と対象を明らかにする必要があり、「ヒューマン・ケアの資格」では、「ケアの本質は何か」という議論を深め、それに裏打ちされた理論・技術のうち「何を習得範囲とするのか」を明確にすることが重要である、とのコメントがありました。

三人の話題提供の先生方のご発表を伺い、ヒューマン・ケアに関する学会認定資格や研修を今後も検討することには意義があることが確認できました。その前提として、江花先生が指摘されたように、ヒューマン・ケアの本質に関して、本学会で議論を深め明確にしてゆくことが重要であるとの認識が深まったラウンドテーブルでした。

（桜美林大学大学院老年学研究科　長田久雄）

「日本交流分析学会への派遣演者として」

埼玉県立大学　鈴木 玲子

本合同大会では、日本ヒューマン・ケア心理学会と日本交流分析学会の双方の学会員が演者を招いたプログラムが配置されるとともに、両学会プログラムに双方の学会員が自由に参加できるものでありました。

私は日本交流学会のプログラムである「チーム医療における患者理解の共有」のシンポジストとして発表と意見交換に参加しました。交流分析を専門とされる研究者らの発表は、医師が慢性疾患患者を理解するために交流分析を活用している経験が述べられ、心理士は多職種間で協働して活動するために交流分析の視点に立って自分の役割を見つめていることが発表されました。そして看護師からは認知症高齢者とのコミュニケーションでの他者理解に活用できるエゴグラム尺度開発の発表がなされました。医療や福祉分野において交流分析が、他者理解や自己理解に有用に利用されていることが理解できる内容でした。私の発表は、チーム医療に不可欠である多職種連携を円滑に行うために注目されているIPE（Inter-professional Education）の教育実践を紹介しました。チーム医療に関わる専門職者らのクライアントの理解を共有する学習として、保健医療福祉分野の各職種を目指す学生たちをチームに編成してフィールドに出向き、そこでクライアントの問題解決（課題）の検討に取り組む学習過程でのリフレクション作業を通して「チーム形成」や「多（職種）領域の相互理解」を見つめる学習機会になっていることを報告しました。

シンポジストと参加者とのディスカッションでは、シンポジストらの実践する交流分析の手法や現場での応用について、交流分析の発展の可能性についての質疑応答が活発になされるとともに、日本交流分析学会の岡田大会長からは、IP教育での専門職種間での自己理解と他者理解を深めるための評価方法に交流分析を活用する提案についての発言もありました。

この日本交流分析学会とのセッションを通して、ヒューマン・ケアを考える上で大切な「ひとを理解すること」についての学術的な交流ができたことは大変意義深く、大いに刺激を受けるものでした。今後も機会がありましたら、このような取り組みができますことを期待したいです。

「学術集会第十六回大会に参加して」

香川大学大学院医学系研究科看護学専攻
KKなつめ代表取締役・
訪問看護ステーションなつめ看護師　山西 育子

今回、初めて四国・香川県で日本ヒューマン・ケア心理学会が開催されました。地元開催でもあり大会ボランティアも兼ねて参加致しました。今大会のテーマは「ヒューマンケアと看護学」でした。参加前には、心理学の学会ということで少し敷居の高さを感じ、初めてのポスター発表も控えて緊張もしておりました。しかし、大会の雰囲気は、人間の理解とケアに主眼がおかれた学会の特色どおりの親しみやすさと品格が感じられ、初対面の参加者や大学の先生方とも、気さくにお話をすることができました。いつのまにか緊張感もほぐれリラックスした状態でポスター発表に臨むことができました。発表では、数人の方から質問を頂きました。その中で、今回私が研究テーマとしている首尾一貫感覚を、小児のケアに活用するための研究を続けているとの情報も頂きました。理論を実践に活かそうと取り組んでおられる質問者の熱心なお姿に大変感銘を受けました。このような意見交換ができたことは、私にとって貴重な経験となり、研究を実践に活かすことの重要さを再認識致しました。ご質問を下さいました先生方に心より感謝いたします。大会一日目の夜の懇親会では、皆様のお席をまわり写真撮影を致しました。カメラを向けると直ぐにポーズを決めて撮影に応じて下さり、少しお酒を召し上がった皆さまの満面の笑顔に癒されました。皆様との出会いを大切に今後も研究に取り組んで参りたいと感じました。



懇親会の様子

第二回日本ヒューマン・ケア心理学会論文賞

「学会論文賞を受賞して」

共立女子大学　伊藤 まゆみ

このたびは、名誉ある「第二回学会論文賞」を頂き、大変光栄に思います。受賞にあたり、共著者である小玉正博先生を初めとして、投稿論文の査読を通してご指導頂きました先生方に心より感謝を申し上げます。

修士課程修了後より、私は看護実習で終末期ケアを学ぶ学生の支援として、コミュニケーション・スキル獲得訓練を行って参りました。あるとき、終末期患者を担当していた学生が「コミュニケーション・スキルを獲得しても意味が…。」と言って口ごもる様子がありました。その学生にしてみれば、患者さんの苦悩を傾聴するスキルを使用しても患者さんの苦悩は強く、聞いている自分も辛くなるという状況がありました。私はそのような学生の反応が気になり、あれこれと介入を試みました。その成果もあって、実習終了時には、学生は頑張った分だけ、患者さんとの良い関係も築け、看護者として成長している様子がありました。

このような状況において、彼らに何が生じているのかを質的に検討したのが本研究です。「臨死患者のケア実習における看護学生の心的衝撃への対処プロセス」では、私が想像していたより遥かに学生の臨死患者ケアに対する混乱や戸惑いは強く、その心的衝撃に対して教員が適切な支援をするか否かで学生の対処や情緒には違いがありました。また、そのことは学生の実習終了後における成長への知覚ということでも違いがありました。

この研究を通して、私には大きな学びが二つありました。一つは質的研究の大切さです。それまでの私は量的研究で成果を判断してきました。しかし、量的研究では、学生に何が起きているのかというプロセスが見えませんでした。質的研究はすぐに結論は出ませんが、対象の声に耳を傾け、言葉の一つひとつを丁寧に辿れば、点でしか見なかった世界がプロセスとして浮き上がってくように感じました。後一つは、学生のポジティブな側面に着目することの大切さです。この領域の多くの研究は、学生の不安や脅威、できていないことに着目してきた傾向があります。しかし、そのような状況においても学生はどのような努力をしているのか、何がどのようなきっかけでできるようになったのかに着目すれば、心的衝撃に対する個々の学生の自己調節力や成長が見えてきました。今、改めて、本研究が自身の研究のターニングポイントであったことを実感しています。

この研究で明らかにされたことは、私に研究のための地図を与え、何をすれば良いのかを指し示してくれます。今では、いくつかの尺度開発や調査、それに基づいた介入研究が行われ、終末期ケア実習教育ユニットの開発が進んでいます。終末期ケアを学ぶ学生への実習場面での支援にこだわり、ライフワークの研究を続けられることは幸せなことです。このような機会を与えて頂いた看護学生、終末期患者、終末期ケアに携わる看護師の皆様、研究を支えて頂いた全ての皆様に深く感謝申し上げます。



学会論文賞を受賞した
伊藤まゆみ先生と
共著者の小玉正博先生

研修会

戈木クレイグヒル滋子先生による「グラウンデッド・セオリー・アプローチ入門」

大会二日目の研修会にて、戈木クレイグヒル滋子先生がグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）入門のご講演をして下さいました。戈木先生はGTAの歴史的変遷と研究方法・手順について、アイディア溢れる視覚的資料を用い、ご自身の研究データも織り交ぜながらひとつひとつ詳細にご説明下さいました。

ある状況から異なる複数の状況へ変化する複数のプロセスを把握するGTAでは、データを収集する道具（研究者）の価値観や生き方が反映されることを踏まえながらバイアスを可能な限り少なくするためにデータ解釈の根拠を明確にすることが重要だとご説明頂きました。また、GTAのデータ収集は一期一会が原則であり、リサーチクエスチョンに関わる部分が詳細に含まれたリッチなデータが重要であるとご説明頂きました。一回のインタビューや参加観察で出会う状況の貴重さを学び、身が引き締まる思いが致しました。データを読み込む段階ではデータを離れて読むことと近づいて読むことの両方が重要であるため研究者のフットワークを軽くし、思いついたことを詳細にメモしながら、よりリッチなデータとしていく重要性をご説明頂きました。

データの切片化、プロパティとディメンションの抽出、ラベル名付けなどの分析方法について、実際のデータを用いて参加者が実践してみる機会を設けて下さいました。会場一体となって取り組むことで、参加者皆で学びを共有することができました。さらに、戈木クレイグヒル版GTAのアキシャル・コーディングにおけるカテゴリー関連図の検討方法や次のデータ収集への活用方法を解説して頂き、実際の方法を肌で感じることができました。データから概念を抽出し、概念間の関連づけを行おうとするGTAでは、結果としてリサーチクエスチョンの周囲にある複数の現象も明らかになり、それら周囲の現象が次の研究に繋がっていくとのご説明から、研究全体に通じる、積極的な研究発表の意義と研究の積み重ねの重要性を感じました。

桜美林大学大学院教授の長田久雄先生をはじめとする参加者との質疑応答によって、さらにGTAへの実践的理解を深めることができました。質疑応答では、GTAを用いるのに適した研究とそうではない研究として、戈木先生ご自身の研究や研究指導経験に基づく複数の事例をご提示下さいました。ご提示下さった事例の状況をありありと思い浮かべながら、医療の領域に留まらない様々な分野におけるGTAを用いた研究の可能性を感じることができました。

研修会ではGTAを学ぶことに留まらず、研究全体のリサーチクエスチョンのあり方や研究結果の位置づけの明確化などを改めて学ぶことができ、大変意義のある貴重な体験となりました。今後、研究者の感受性や柔軟性を高め、データ収集力や分析力をより一層磨き、研究者という道具の精度を高めるべく精進していきたいと思います。

（日本赤十字看護大学大学院看護学研究科博士後期課程 山内朋子）



研修会 戈木クレイグヒル滋子先生

「第二回学会論文賞の講評」

第二回論文賞審査委員長　岩崎 祥一

第二回日本ヒューマン・ケア心理学会論文賞審査委員会は、私を審査委員長とし、安保英勇先生、石川利江先生、志賀令明先生、島井哲志先生を審査委員として、一昨年秋に発足いたしました。対象となった論文は、二〇一一年第十二巻一号から二〇一三年第十四巻二号までに発表された十二本の論文でした。第十四巻二号の発刊が遅れたこともあり、実際の審査を理事の先生方にお願いしたのは、昨年の六月でした。各先生方には、論文賞の候補としてそれぞれ三本の論文を順位をつけて推薦いただき、それをもとに一位を三点、二位を二点、三位を一点として合計点を出し、論文賞を選ぶこととしました。

今回候補となった十二本の論文は、実験的なもの、質的研究、調査研究と内容は多岐にわたっており、それぞれ論文としてしっかりとした問題意識に基づき、妥当な方法論と分析法により結果が述べられており、いずれも読み応えのあるものでした。

なかでも受賞論文となった二〇一一年十二巻一号に掲載された伊藤まゆみ先生を筆頭著者とし、小玉正博先生と大場良子先生を共著者とした「臨死患者のケア実習における看護学生の心的衝撃への対処プロセス」は、他を引き離して多くの理事の先生方から高い評価を受け、議論の余地なく第一位に選ばれました。

この論文は、終末期ケアを臨床実習として経験した看護学生に対する支援モデルを開発することを目的としたもので、看護学生が実習中に遭遇する人の死や臨死患者と接する中で経験する心理的混乱や心的衝撃を軽減するための教育上の対処法を開発することを目指したものです。この研究では、そのために実際に臨床実習でそうした経験を経た看護学生に対して聞き取り調査を実施し、その内容を質的に分析し、そこから臨死患者のケアがもたらす心的衝撃や情緒的混乱に対処するために必要となる「自己調節のための心理教育的支援モデル」を構築しています。以上のように、この論文は、「人の死」という重い問題を扱う必要のある看護教育に対する意義深い貢献となっており、第二回論文賞にふさわしい研究と考えます。

第十六回大会優秀発表賞　口頭発表部門

「優秀発表賞を受賞して」

香川大学医学部附属病院　山本 麻理奈

今回、優秀発表賞を賜り大変光栄に思っております。審査をしていただきました先生方、ならびに共同研究者である先生方に感謝申し上げます。また、研究にご協力いただきました患者様とそのご家族の方々にも、この場をお借りしお礼を申し上げます。

私がこのたび発表させていただきました「筋萎縮性側策硬化症患者の介護継続過程における配偶者の態度」では、今まで注目されなかった入院患者の家族を対象に、介護を継続していく過程の解明を試みました。入院患者の家族は一見、在宅患者の家族に比べて介護負担も少なく、介護を継続しやすいように思われがちです。しかし、本研究では患者の意思が不確定なまま侵襲的人工呼吸器の導入が行われ、介護を行う配偶者の苦悩を生じさせ、介護継続の過程を揺るがしていると考えられました。また、侵襲的人工呼吸器からの離脱が容易ではない現在の日本では、療養生活の無限性へと繋がり、苦悩を深めていることも明らかになりました。

私は本研究をまとめるに至り、難病を抱える患者とその家族の療養の継続は容易ではないことを改めて感じました。患者と家族には疾患の進行と共に様々な困難、そして分岐点が現れます。その時、患者と家族がより良く生きる為の選択が出来るような援助が療養の場で提供できなくてはなりません。そのために私は、今後も研究を積み重ねていきたいと思います。

第十六回大会優秀発表賞　ポスター発表部門

「優秀発表賞を受賞して」

足立区スクールカウンセラー　知久 昌史

この度は、第十六回大会にてポスター発表部門での優秀発表賞を賜りまして、大変光栄に思います。審査して頂いた先生方、ご指導頂いた東京成徳大学の石村郁夫先生および石村研究室の皆様、そして研究にご協力頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

臨床心理学の分野では、あるがままの自己を受け入れる「自己受容」が重視されており、特に否定的な側面（弱み）を含めた自己受容が自尊心を支えていると考えられてきました。一方で、弱みに振り回されると嫌な気持ちになり、不安やうつ等の心理的問題と関連することも報告されています。これらのことから、弱みに振り回されずに、向き合い、受け入れることが大事であると考えました。そこで本研究では、弱みに寛容になるプログラムを開発し、その効果を検証しました。プログラムは一週間の心理教育と、一週間の筆記療法を組み合わせたものでした。その結果、プログラムの有効性が示され、弱みを含めた自分を受け入れられるようになることが確かめられました。また、物事を柔軟に捉えられるようになり、過剰に失敗に囚われることなく、落ち着いて物事に取り組めることがわかり、そのため、恥やうつ等の心理的問題が軽減されることもわかりました。さらに、このプログラムの効果は、効果が持続されることも示されました。

今後は、プログラムを精査し、実施の工夫等含め改善し、より多くの方々に利用可能な支援策となるよう、努力を重ねていこうと思います。



サンポート高松からみた瀬戸内海

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会
第17回大会のお知らせ
〈Resilience：回復にむけてのヒューマン・ケア〉

日程…　2015年9月26日（土）・27日（日）
会場…　日本赤十字看護大学（広尾キャンパス）

大会テーマ…「Resilience：回復にむけてのヒューマン・ケア」

・大会講演　「喪失とケア」（仮題）
　窪寺 俊之 氏（聖学院大学）
　（大会講演は一般公開となります。定員250名）
・シンポジウム　「喪失とレジリエンス」
・研修会　「ミックス法：質的研究と量的研究の統合」
　講師　操華子先生（宮城大学看護学部教授）
　（原則として事前申し込みですが、空きがあれば当日参加も受け付けます。会員には修了証を発行します。）

今後のスケジュール
1. 演題申込・発表論文集原稿提出　2015年6月19日
2. 事前参加申込　2015年6月19日
3. 研修会申込　2015年6月19日

■抄録は大会の当日、受付でお渡しいたします。

大会HP　http://jhc2015tokyo.jimdo.com
大会事務局：日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第17回大会事務局
日本赤十字看護大学　遠藤公久研究室気付
〒150-0012　東京都渋谷区広尾 4の1の3
電話・FAX：03（3409）0914
E-mail：humancarepsy@redcross.ac.jp
運営事務局：日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第17回大会運営事務局
株式会社 イベント&コンベンションハウス
E-mail：jhc17@ech.co.jp
※お問い合わせは、福田、高橋まで、メールでお願いいたします。

第17回 大会準備委員会委員長…　遠藤公久（日本赤十字看護大学 教授）

「ヒューマン・ケア研究」投稿論文募集

学会誌は年二回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。詳細は左記学会誌編集事務局にお問い合わせください（昨年度より変更になっておりますのでご注意ください）。

（編集担当　安保英勇）

Web担当からのお知らせ

学会のWebサイトは、下記の通りです。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文（2000-2013 No.2）のPDFが学会Webサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には以下のIDとパスワードを入力する必要があります。また、このパスワードは、会員以外にはお知らせにならないようお願いします。
ID：HCkaiin2015　パスワード：HyPzBu18
このID及びパスワードは、2015年4月1日より有効となります。それまでは前年度のID及びパスワードをお使い下さい。

（Web担当　岩崎祥一）

編集後記

広報委員が交代になり、本号は、前任の廣瀬清人先生にいろいろ伺いながら、新しいメンバーである片山富美代先生、石川智先生、私の三人で、作成に取り組みました。無事に発行することができましたのも、快く執筆をお引き受けくださいました先生方、並びに関係の皆さまのご尽力の賜物です。心から感謝申し上げます。

ニューズレターおよび広報について、ご要望などがあれば、学会事務局広報委員会までご連絡ください。

（広報担当　木村登紀子）

学会事務局および学会誌編集事務局の連絡先は次のとおりです。

●学会事務局
〒150-0012　東京都渋谷区広尾4の1の3
日本赤十字看護大学　遠藤公久研究室気付
E-mail：humancarepsy@redcross.ac.jp
電話・FAX：03（3409）0914

●学会誌編集事務局
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内27の1
東北大学大学院教育学研究科　安保英勇研究室気付
E-mail：jhcs@m.tohoku.ac.jp
電話・FAX：022（795）6149